

## 日本ミツバチに魅せられた男

最初は、日本ミツバチに魅せられ、会社の経営を一時中断して、その飼育に取り組んでいる高野貞治氏（64歳）を紹介します。

高野氏は、60歳を過ぎたら、地域の環境や福祉に関係したことに携わりたいと常々考えており、特に環境については、次世代がごく当たり前に暮らしていくため連綿と引き継ぐことが、今を生きる人間の使命であるとのこと。

そして、高野氏がたどりついた究極の環境のバロメーターは、日本ミツバチの生態を知ること、そして、日本ミツバチを増殖することでした。

なぜなら日本ミツバチは、その地域に住み続ける、いわゆる、土着生物であり、そして、地域全体の植物から蜜を取り、ポリネーション(花粉交配)を一年間通して行うことにより、確実な植生の維持に貢献しているとのこと。それに比べ、西洋ミツバチは、ハチミツの採取のため、花が終わると、南は、九州・沖縄から、北は、青森・北海道へと、花を求めて移動させる人間のための家畜に過ぎないとのこと。もう少し、日本ミツバチと西洋ミツバチの違いを述べておきます。

## 日本ミツバチと西洋ミツバチ

現在我が国で養蜂業として飼育されていますミツバチは、明治時代に欧米から輸入された西洋ミツバチです。日本ミツバチと比べ、体は一回り大きく、蜜を採取する能力が優れており、養蜂が生業として行えるハチです。しかし、日本ミツバチのように、天敵であるスズメバチの襲撃に対する防衛手段を持っていないため、自然界での生育は難しく、人間が用意した巣箱で飼育されていることから家畜として位置づけをしています。日本ミツバチには、200~300匹以上の働きバチによる蜂球(ハチが一塊になった状態)により、スズメバチをその蜂球に封じ込み、蒸し殺しにしてしまう、防御法を持っています。このことは、ミツバチを餌とするスズメバチの生育分布に起因するものであります。日本ミツバチ及び同系統のトウヨウミツバチの分布している日本を含む東南アジアには、スズメバチが生息しており、その防衛行動を日本ミツバチは、蜂球という手段で防衛してきましたが、西洋ミツバチの分布する欧米には、元来、スズメバチは、生育していないため、防衛行動の進化がされなかったと考えられています。自然界の「食う者」と「食われる者」の共存の歴史が遺伝子にインプットされたか、されなかったとも言えます。

## 日本ミツバチは環境のバロメーター

日本ミツバチは、自然界に土着して生育することができるが、西洋ミツバチ

は、人間の管理なしには、生育することが難しいことが理解されたと思います。

高野氏は、この土着生物として地域全体の植物から蜜を取り、ポリネーションを一年間通して行う日本ミツバチを、地域の環境のバロメーターのシンボルとしました。

このようなことから、その地域の環境のバロメーターは、日本ミツバチであり、ハチを増やすことは、良好な環境(生態系)の創出に繋がることと確信されました。こうして、高野氏の地域環境への貢献がスタートしました。

しかし、日本ミツバチの飼育には、ハチの確保が必要であり、一つの巣箱を確保できるまで、なんと5年間で費やされました。そして、それは、突然、訪れました。たまたま、出向いた、お寺のお堂でハチの分蜂(巣分かれ、お産)に遭遇し、運良く、蜂球を捕獲することができたのです。

## 農地の借り受け

しかし、それからが、問題でした。

日本ミツバチは、土着生物のため、飼育するには、巣箱や分蜂する最低限のできれば農地が必要となりました。しかし、農家ではないため、農地を借りることはできないと、頭を抱える日々を送っていました。そんな時、たまたま、私が管理している「ユートピア農園」の花畑で話をする機会がありました。高野氏とは、以前、花による地域おこしの講演時に意見交換をしたことがあり、その後、何度かお会いしていました。

早速、誰でもが農業をすることができる南足柄市の農業委員会が施行した「市民農業者制度」を説明し、正式に農地を借りることができる「市民農業者」になることを勧めました。

そして、平成 25 年 1 月に農業委員会から「市民農業者」の認定を受け、約 900 m<sup>2</sup>の農地を借りることが出来ました。高野氏が借りた農地はというと、山林化した傾斜地の農地でありました。このような農地のほうが、ミツバチの隠れる場所としての木々の存在や蜜源となる花、山菜を始めとした自給自足的な農作物の栽培などが無理なくできると判断されました。ですから、整然とした農地ではないが、木々は見受けられるが耕作を放棄した農地でもない、丁度、農地と山林の中間的な畑とでも表現しておきます。

しかし、周囲の農家からは、以前と比べて、農地らしくなったと評価され、地元の農家の理解を得ることと、ミツバチの飼育を通してのコミュニケーションが生まれる好結果がもたらされました。

## 分蜂(巣分かれ、お産)

平成 25 年 4 月 29 日、たまたま、高野氏の畑に立ち寄ったところ、偶然にも、

今年、最初の分蜂に遭遇しました。巣箱の周りには、多数のミツバチが乱舞し、巣箱の中で何かが起ころうとしていました。どうやら、分蜂が始まったようだと言いました。すでに、ミツバチが巣分かれできるよう、畑の中の木々には、蜂球を作る簡易な屋根つきの止まり木が用意されていました。高野氏は、まず、働きバチが新しい住み家となる場所を偵察し、その場所が適当と判断したら、巣箱に戻り、OKを伝達すると、一斉に巣立ちして、蜂球(約1000匹のハチの塊)を作り、最後に女王蜂が移動して、分蜂が終了するとのことでした。まったく、その通りにことは進み、用意した止まり木に一塊の蜂球が出来上がりました。間を入れずに、この蜂球を網袋で捕獲し、新たな巣箱に収めて、作業は終了しました。

この一連のミツバチの行動は、我々人間の社会と同様な指示系統があり、その行動パターンを高野氏はよく理解していると感じました。

高野氏、いわく、ミツバチそのものが自分の子供、いや、孫のように可愛く、愛おしく、この世になくってはならない存在になっており、毎日がミツバチ三昧だそうです。

## 地域環境への貢献

日本ミツバチの蜜は「百花蜜」と呼ばれ、その地域に自生する様々な花の蜜を採取することからも、そのように呼ばれているとのことでした。

西洋ミツバチのように花を求めて各地に移動するのではなく、土着生物として、その地域に住み続け、一年間を通したポリネーションにより、植物の実がなり、種子ができ、地域の植生が永年に渡り、維持される重要な役目を果たしています。そして、日本ミツバチが増えることは、その地域の自然環境が良好である証拠でもあり、地域環境への貢献に繋がるものと考えます。

日本ミツバチの飼育を養蜂業として捉えると、採取できる蜜量は、西洋ミツバチと比べるとその5分の1から10分の1とかなり低く、とても生業にすることは困難です。

しかし、60歳を過ぎた、第一線を退いた(退いていないと思っている人を含む)シルバー世代の夢の実現であり、ロマンの追及であると、高野氏は言っております。

そして、そのことが社会貢献に繋がっていると勝手に解釈する思い込みこそが、毎日をイキイキと暮らすことができる源泉とのことでした。美味しいハチミツもその一つです。

今回の高野氏が取り組んでいる日本ミツバチの飼育については、シルバー世代でなくては、出来ない社会貢献の一例として紹介させていただきました。

## 終わりに

現在、国内のハチミツの 90%が中国からの輸入です。高野氏いわく、国土の砂漠化や黄砂などが深刻化している中国に、日本に輸出することのできる花の蜜源があるか疑問に感じるとのことです。また、一般にハチミツの蜜は、花の蜜からミツバチが採取するものと考えているが、砂糖水も蜜源としてなっていることも現実とのことです。

